

# 郷土室だより

第 15 号

昭和51年12月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025

## 切絵図考証 二

安藤 菊二

### 薬研堀周辺―2

最初から追記の形になって恐縮だが、前回出した薬研堀埋立地周辺で、米沢町二丁目角地の「名倉弥二兵衛」を取上げるのを忘れていた。

#### ○名倉彌二兵衛

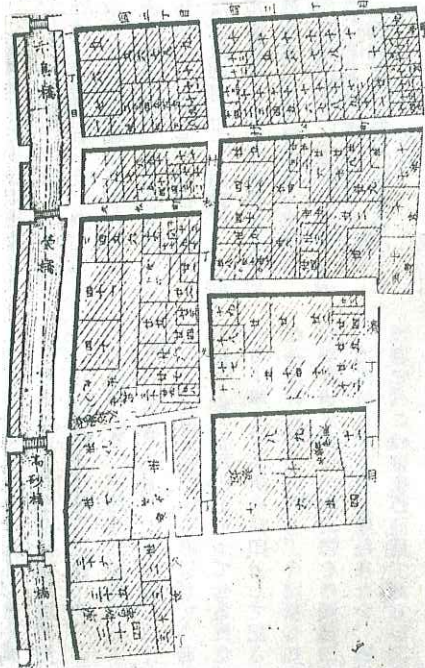
接骨医として知られた千住の名倉家の分家である。天保十三年版の『広益諸家人名録』に、大阪町名倉弥次兵衛と出ていて、書家、号は忍齋、名は千全、字は竜溪、一号拙誠堂とある。弘化、嘉永頃に、この地に移ったものとみえる。

安政二年（一八五五）の江戸大地震の時に、浜町辺の武家屋敷では潰れた家で怪我をした者が多く、「外科名倉弥次兵衛が許へ療治に来る怪我人、始の裡は一日に四百人或は五百人、門前釣台と駕の市をなせり、其の余外科の家々、皆療治人日に多く来る」と斎藤月岑の『武江地動之記』に書いてあるが、『なみの後見冊』（理科大学地震教室蔵）には更に詳細な記述が見られる。

「（上略）夫より浅草御門を入れて、両国広小路に出、薬研堀を巡見するに、夥しく人の群居して駕籠杯立並べたれば何事やらんと

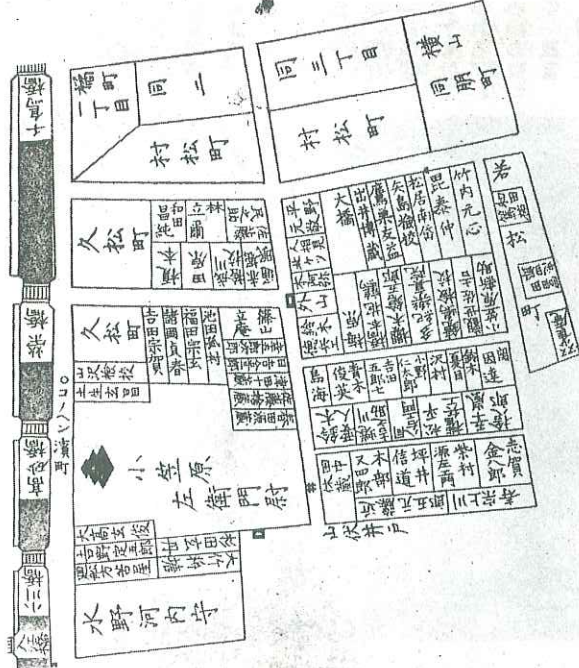
「松浦宏ノ東京大小区分絵図」

明治7年 第一大区(四)の甲号(部分)



「日本橋北内神田両国浜町明細絵図」

嘉永3年 金鱗堂版切絵図(部分)



問ふに、接骨療治名倉弥次兵衛が出張所也と言まゝに立よりて見れば、女乗物十挺ばかり、其余の駕籠二十余挺、又釣台に載せたる病人、長持に入たる疵人おびたゞし、且あたり近き茶屋及び明屋を借りて臥居ものも甚だ多し。往還は行かひならぬ迄立つどへり。頓て内方より病人をよび入るゝをきくに、第百八十三番と呼はりたり。此時まだ昼九半時前なるに、かく数番の療治人なれば、一日の内にはいづれ三百余人は来るべきや。此名倉と言は、千住に本家ありて、江戸内二ヶ所の出張有るときゝつれば、三所を合せば一日千人位の療治なるべし。その余官医はさらなり、諸侯抱の外科、および市中渡世の外科を通じて、江戸内十町に疔家を算し、又その一家の療治三十人づゝと積りても、殆ど万をもて数べきならん。地震の災厄ます／＼恐るべし。それより内神田亀井町、弁慶橋、柳原土手下辺、大門通り、神田堀へかけては潰れ家多く、又潰れざるも家並倒れかゝりて危ふければ、往還をも憚らず、左右より杉丸太桁木の類もて、むかへ杭を立並べしゆゑたやすくゆきもなりがたし。云々」

〔「大日本地震史料、下巻」による〕  
豊島寛彰氏の調査によると、名倉氏

の家系は詳らかでなく、千住の名倉氏では、四代目弥次兵衛直賢が、接骨医の始祖で、武備心流整骨伝によって、医法を定め、文政年間、日本橋大坂町に開業したとも、五代目玄寿(良昔)の弟知重が分家して、同年間に菓研堀の家を起したとも、伝えてある。忍齋は柔術をよくしたそうである。忍齋は柔術をよくしたそうである。嘉永三年(一八五〇)一月八日歿した。(五三)。墓は千住五丁目の安養院にあるという。(豊島氏「兩田川とその兩岸」補遺、中巻)

私は、かつて、上野図書館所蔵の、村扨了阿の張込帖の中に、忍齋の手書の存するのを窺たことがあるが、手帖も失い、記憶も今は定かでない。

○雷権太夫

この人についてはなお語るべきことがあった。相撲年寄の雷権太夫は、嘉永・安永の頃には、浅草三好町に住んでいた。嘉永六年(一八五三)アメリカのペリーの引率の艦隊が渡来して以来、江戸市中の騒ぎは、鼎の沸くがごとく、江戸防備のために急拠お台場を築造することになった。その風聞を聞くと、熱血漢の権太夫は、居ても立つてもおられず、その筋へ次のような願書を提出した。

相撲年寄惣代

浅草三好町清七地借

雷 権太夫

外二人

今般異国船渡来候処、相撲取共、

当时上方筋え罷越、式百人程江戸表

に罷在候。右之者共、身命を投捨

(土腕カ) 取御用にも相勤度、若御

用御座候はゞ、旅行之者共をも早速

呼戻候旨六月十一日願書差出申候。

(雑誌「武蔵野」第一八巻第一号所収、吉村

敬郎氏「黒田筑前侯殿ケ開藩邸の話」)

たぶん権太夫の請願は聞き届けられ

相撲取達はお台場の築造に、一肌も二

肌も脱いで働いたことであろう。

●横網梅ヶ谷は、明治一八年八月場所

を最後として土俵を退き、年寄雷権太

夫を襲名している。(三木要花著「江戸時代の角力」)

○生方鼎齋

書家である。切絵図には載っていないが、菓研堀に住んでいたことは、天保七年版「江戸諸家人名録」によつて知られる。おもしろいのはこの人の「蔵書印」で、印面に

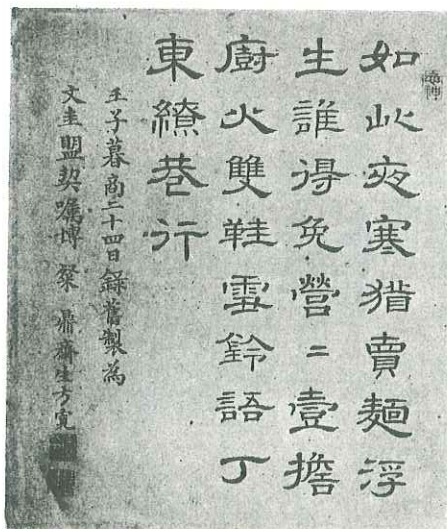
生方寛字猛叔号鼎齋、又号一粟居士、寓于西国菓研茶肆井筒之斜対門矮屋籬笆是也

と刻んである。三村清三郎翁は「本の話」(二六八頁九頁)にこの印を紹介され、且つ、附するに「丁寧過ぎていとをかし」という評語をもってせられた。

ご丁寧に、住所の目印として記された茶肆井筒屋の場所も、今は全く知れなくなつたから、鼎齋苦心の蔵書印もその住所を示す料とはならない。

さて、この書家の鼎齋であるが……酒の上の喧嘩がもとで安政三年の正月自宅の近くで殺された。その時の模様

が、喜多村信節の随筆「聞之任」(きまのまにまに)に記録されている。



生方鼎齋筆蹟

「安政三年丙辰正月十七日夜、書家、生方鼎齋、通称造酒、上毛人、住三村松丁、殺害されし由縁を承るに、同日矢の倉画家福田半香（渡辺

華山門弟、鼎齋及武四郎も共に同前至て懇意の中らひなり）が発会の事有て、鼎齋招かれしが、劍法家金子武四郎（水府公外藩）に出合、夜に入り、酒興の余り両士拳を合しに

武四郎合負、終に争論に及び、武四郎并同人門弟兩人共に其座を辞して歸れり。しかるに鼎齋より息男桂一郎（歳十四）并僕二人迎に來れり。

鼎齋甚醜酌にて、戌刻頃歸れるに、彼三人、半香が門前に待居、鼎齋に斬付、疵負ながら、鼎齋也、戸を排けくと呼はりしかど、半香家族共周章のあまり、鼎齋を扶けず、遂に三人にて殺害に及びしを、男桂一郎は傍に身をふせて、此終末を見還り

僕共は驚怖して忽逃去りしとぞ。其後南町御奉行御懸になり、武四郎は吟味中揚り座敷仰付らる」

●今は亡き古香翁の蒐藏品中に、鼎齋の詩箋があるので写真を掲げておく。詩は、

此の如き夜寒、猶麴を売る  
浮生誰か得て営々たるを免がれん  
毡担の厨火、雙鞋の雪  
鈴語丁東、巷を續って行く

と、

というのである。壬子、すなわち、嘉永五年（一八五〇）の作である。

○半井策庵  
半井氏は、和氣仲麿から出た名家で室町時代には、曲直瀬氏と並んで医道の覇権を掌握するにいたった。

半井氏の自家の邸宅は京都烏丸中立売の北にあり、庭に大井戸があった。明親の時、その井戸の中間に隔てを設けて、半もて禁裏の御料に用い、半は家事の用に充てることとした。後柏原院これを聞こし召され、半井と名づけられた。以後、和氣氏の姓を半井氏に改めたという伝えは、あまねく人の知る所だ。

明親（驢庵と号した）の家は、医師の優れた弟の光成（瑞策）が継ぎ、子孫世々典葉頭に任ぜられた。

●策庵の家が何代目半井氏の分家であるのか、私の調査はまだ行届かない。弘化四年・嘉永二年などの武鑑に「奥御医師」（二百俵高、御役料二百俵）半井策庵法眼と出ているのを知るのみである。

第2 若松町  
「諸家人名録」を検すると、この地区居住の書画文人に、

若松町 堤 鴻左（儒、折衷学）  
天保七年版

上田小柯（俳学）  
林 絢斎（書画）  
文久元年版

佐竹永海（画）  
松浦琴雅（博学）

といった人達の名が見える。しかし、これらの人達の名は文久の切絵図には見当らない。

○双雀庵  
俳人、雙雀庵永壺であらう。

『俳三昧』（京橋圖書館蔵本）という雑誌、二巻三号（大正十三年三月号）に瓦全生という人が投稿した「元治の俳壇に就て」という一文に、同氏所蔵の元治元年四月発行の『諸国俳諧雷名競』という番附が紹介されていて、この番附の中央に、年寄として、

梅之本為山。伴水園芹舎。麦慰舎  
梅通。菊守園見外。暮雪亭而后。  
雙雀庵永壺。松屋庵鼎左。鱗竜亭  
士前。守株庵黙池。相応軒淡雪。

と大字に記されている、と説明してある。

幕末から明治にかかろうとする混乱の時代に、江戸には双雀庵のほかに、小築庵春湖、潜庵新甫、孤山堂卓郎、佳峰園等裁、一具庵尋香、不説庵五雀などといった人達がいいて、俳壇の殿將

として、俗了した俳句を拈っていたことを知る。

第3 村松町  
「諸家人名録」に

村松町 沢田東里（書家）  
文化二年版

出井哲斎（学医）  
天保七年版

法眼永秀（画）  
文久元年版

栗山石宝（画）

といった人達が見えるが、これらの人は切絵図に載っておらず、切絵図に載っている十九人ほどの人物は、ほとんど私には解説ができない。その内、

○毘秦仲  
切絵図に毘としたのは、毘の誤刻である。毘秦仲は、小石川養生所のお雇医師であった。小石川養生所は、天保十四年三月に内部改革があつて、御医師は、町医の中から採用することに改められ、推挙された九人の候補者の中から

本道 毘 秦仲 同 宮本周圭  
外科 粟津道慶 同 神谷玄俊  
眼科 星野秀敬

がえらばれ、同年四月任命された。当時の秦仲の住所は「田所町与四郎地借」とある。

（市史稿、救済篇四、五九）

○多紀楽真院

幕府の医官。元簡の第二子として寛政七年に生れる。名は元堅（もとかた）、字は亦柔。通称は安叔といった。元保六年奥医師に挙げられ医学館教授となり、翌年法印に叙し、楽真院と号した。安政四年三月十四日病没、年六三。

著書に、傷寒論述義、金匱略述義、素問紹識、雑病広要、女科広要、薬治通義、腹珍奇核がある。（小川）（平凡社版『新撰大人名辞典』）

浜町矢の倉の屋敷は、弘化二年に拝領した。『相對替屋敷書上』に弘化二年九月廿二日

山本左膳拝領屋敷浜町矢ノ倉  
式百八拾六坪余 奥医師

伊藤富蔵拝領屋敷、同所 高三拾人扶持  
六拾三坪余

（東京市史稿・市街篇四一―五七二頁）

と見える。

○鏡島検校

江戸でも数少い平曲宗匠の一人であった。この検校のことは、「郷土室だより」第一号にもちょっと記した。参照されたい。

○観世佐吉

御能役者、観世流の太鼓打。（天保四年武鑑）

第 4 久松町

○池田孤村

「画家。名は三辰。字は周二。画軒、旧松軒と号す。

「事歴」越後の人。弱年の頃、東都に來り、画を酒井抱一に学びて其趣を得晩年明画を学びて稍々学風を一変す。曾て抱一の著はせる光琳百図に倣ひ、新撰光琳百図を現はして、世に賞翫せらる。一時抱一の遺跡を鑑定して、世人の疑惑を解く。性雅趣あり、世に一奇人と称せらる。慶応二年二月十三日没す。年六十六。本所大雲寺に葬る。

（扶桑画人伝、東京名所図会、天保人名録）〔沢田章編『日本画家辞典』紀元社、昭和三年〕

●寺は、江戸川区西端江二―三八に移った。法諱、蓮庵孤村居士。

○幸五郎次郎

金春流の「小ツ、ミ」打。『安政六年武鑑』では、住所は「深川□な川丁」となっている。

○日吉金三郎

「御能役者、観世流、地謡、はま丁

やのくら、日吉金三郎」（安政六年武鑑）

●安政六年武鑑には、なお、

観世流 地、はま丁 山ふし井戸 弥石小四郎

地、はま丁 梅若若太郎

地、はま丁 山階滝五郎

といった人達の名が見えるが、切絵図には記載を見ない。

○土生玄昌

「眼科医師玄碩の子。眼科に長ずるので、はやくから擢んでられて幕府の侍医に任せられた。文政十二年、父玄碩が、シーボルト事件に連座して官職を奪われた時に、玄昌もまた官を罷められた。しかるに、天保八年新將軍家慶が痘瘡に罹った際に、玄昌は再び召されて侍医となり、この出仕によって父の玄碩も罪（蟄居）を許されて自由の身となった。

玄昌は後法眼に叙され、禄二百石を賜わる身となった。慶応元年十一月九日没、年六九。江戸築地の本願精得寺内真竜寺に葬むられた。」（佐藤榮七氏著『日本洋学編年史』）

○小笠原左衛門尉

越前勝山の藩主。（二二一、七一五石）「勝山小笠原氏は、小笠原氏の庶流なり。信嶺を以て中興の祖となす。天正一八年信之家康に従って関東に

移り、武州本庄を治む。元和元年三千七百十七石に加封されて、通算現封に至る。爾後、九世子孫相伝へて長守に至って維新となる。明治二年六月勝山藩知事に任ぜらる。（四年七月華族に列す。）」（『列藩要鑑』）

○杉田玄丹

玄丹は玄端の誤記ではなからうか。玄端ならば、この人のことは、杉田成郷訳『医戒』（現代教養文庫）の、杉本つとむ氏の解説に記して、

「実父は尾州藩医幡頭信珉であるが本姓は吉野徳太郎といい、杉田立郷にオランダ医学を学び、やがて杉田家を嗣ぐようになった。明治二十二年までは存した人で、病院を經營し薬価低廉、診察も丁寧無料と、りっぱな人物であった。」と記してある。

◇東京を語る会 第19回の報告

11月20日（土）の東京を語る会第19回は、藤浦富太郎氏の「京橋・日本橋昔話」を予定致しておりましたが、急病のため、急遽変更して、安藤菊二氏に「京橋・日本橋座談」と題して、日本橋三越周辺の史跡を中心に、講演をお願いしました。なお、藤浦富太郎氏は、ご快復後、お話を伺う予定です。